凡生氏

日本國畫

北海道

四

291
12
4
170
104

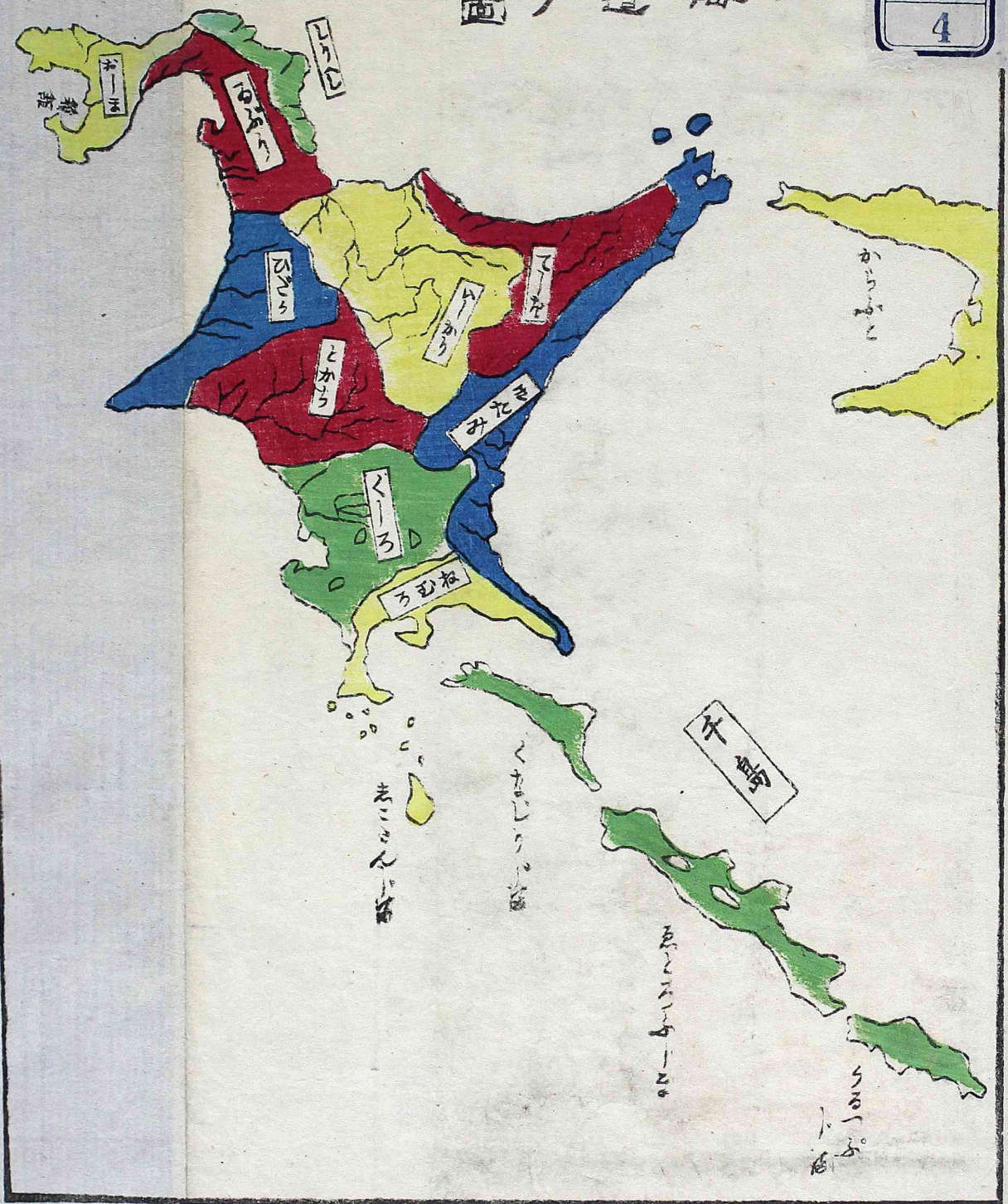
百四

横浜国立大学附属図書館
06402164

日本國畫

291
12
4

北海道ノ圖



瓜生氏日本國盡卷之四

北海道之十一國

即ち之れを樞要の地とす。東は陸奥に迫門を隔てゝ東北に延ひ廣ゝ里たる一大島なり。南は百里東西に百二十

里ふ過ぎて越えて又そのあり
東北の隅より沢山ふ大ふの。
高く数多立并び一直線ふ
連りて。豊前の地の出い。
魯西亞の領地のむさつ西と
北とに越の端乃。迫門のあな

たを撰太州四方海ふて土
地廣く。内地を高山駢列。
時候極めて寒くして。越ふ
山中ふ入りてを一年三百
六十日雪なき時で稀ふ有。
西南ふ海岸を。寶徳三

年ごろいとなみて武田信廣松前に渡て城を構へしよりわ次第に人民稠住して頗る繁昌を極むるなど其余居民繁蹟多く膏腴の地多くとて田畑を開く由なく山を諸穢に写る也

生て出ることなしこの地に住ひぬる土人を「アイノ」と名を呼びく。たゞ山猟と漁を業とし知ることなしの外に一文不通を知

混沌男女ひとしく被髪ふ
て。木の皮獣の皮をもつて五体
を包み衣服とて女も顔ふ
刺青し。胸ふ鏡を掛けたり。
縄を結べる古は。質素の風
を見るごとし。抑御ふの

内なるし。若も王化の及ぬ
ものいまだなきことあり
しを。王政一新以来も未業
の國はまだ多ますでえ。我が大君
はおわ御代よりはじめていけ
えはもみか。文明の世より入

せんかをきく廟議盛んにして
拓殖の方法人たち上命せ
て土地の開拓をいそがせまふ
効さいを今より想ひもうるとも
小きことふそあらざらめ。さ
きずで此地を支配いたすだ。然

てふそのも立てらきずで渡島
北國の松前の地方を除く
地のみ。ふ開拓使の支
配ふく。土地を拓て廣を量
ど。人口まづ十万と。二千ふあ
まる外まを其産物を今も

世てり。寶の國とも申さでこそ。
果うぞ出でん世なれ寶。採さ
ども盡で用う盡ぐ。用ゐつ
くせぬぞ多き。其品しな
振舞さて。山より鑛屬諸材木
獸の毛皮、なめし皮、水さ

鮫ぞ。鯨。鱒ぞ。鱈ぞ。鱘ぞ。鮭
や。鱒。水豹。腽肭臍人。猩々
日ゝ增し數のそや。さむ用
けをよろ昆布。こまこ。ながこ。
玉公。ながこ。より。匠夫匠婦ゝ
ゐるまして用ゐて。初ゝ物ふ

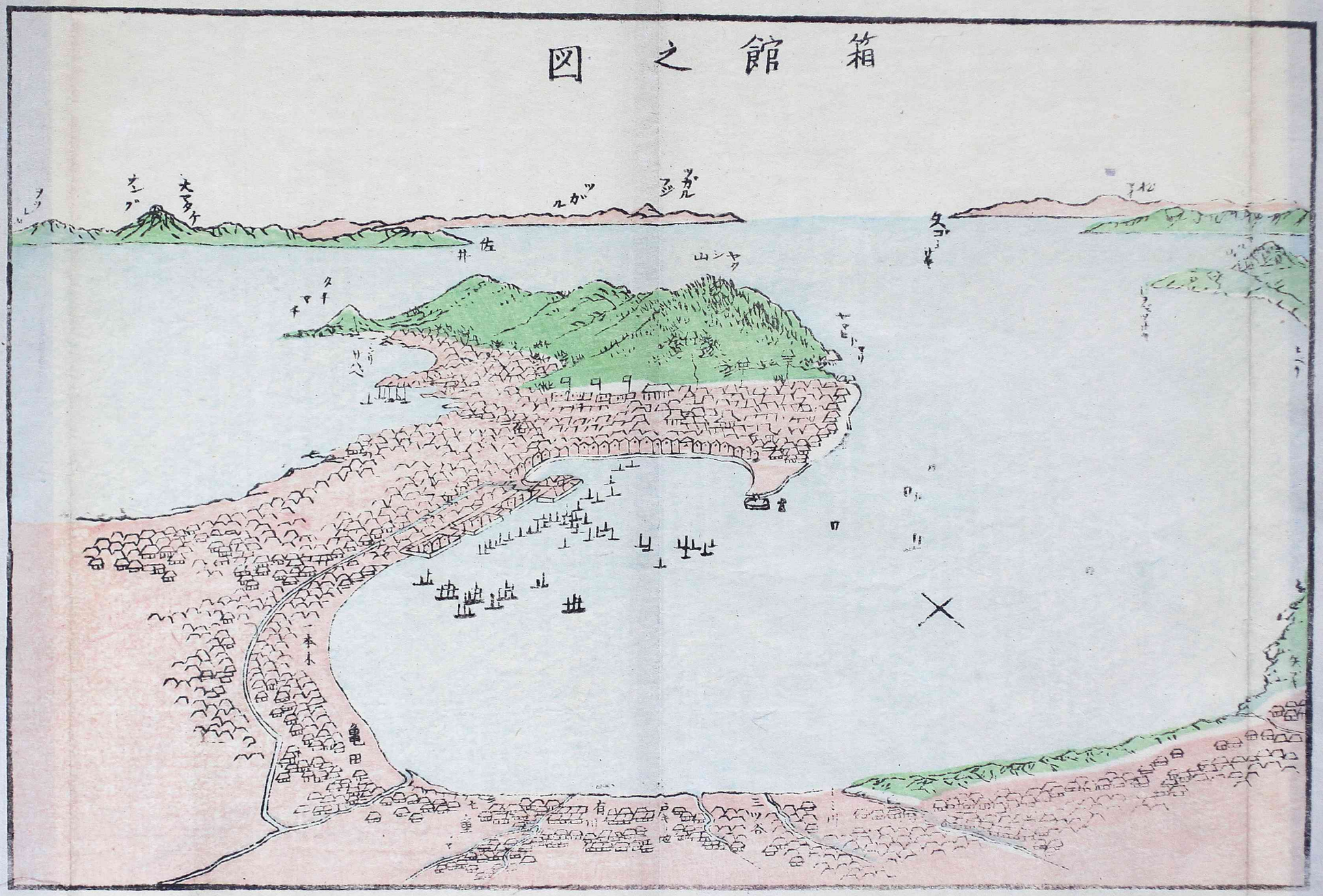
こゝを

其茅ヶ崎を渡島の國に入る。魚の尾ぢちふ所に。二つの岬東西に。分れ出でたる其一は。東の岬なる陸奥の小泊郡に。お對ひ一面なる方なる津軽地

と相向き合ふ中なる海。小なる膳板と後志の二郡に隣る。山多く。見日岳や黒岳也。依て山やんか茅守岳烏帽子黒滝濁川。東に高き駒が岳。其南に湖の大沼小沼の名

元高し。沼の東より大川岳。その
又東の其鼻より。東の岬に端
すして。彼に燒山と一脈の。火
烟吐出て惠散山惠散より
西の方。岸を廻まで沙首崎
又北に西の半島より大地より

箱館之図



彎き灣と成る。其港より
第館地。交易さてのんの一都會。
此の辺さて屋て平地すくなし
然ふ其の第一番其先い西ふ
き蔓岳夫より西北岬おる。
知内、千軒、しゆまたい岳七つ、

八つ長尖岳岬の先に松前の港を市街ふぎをしく人民移住に權興の地地方ふ遠く西方より並びく立つる大島と小島の二つ乃嶋を過ぎ北ふ廻りて鍋江利潤。

笹子山、こき内愛宕山濱手より輪の猟如ほく海手淀づる鷗島江より港船泊まて其ふの方鮫石の浦より近き中歌の山より沒志界方ふ川より西より安奴流川是まで地

の大河なり。河を沿ふて潮り。
水源さかのぼる。東小なり。又こ
越えくゆくときは蒲郡
川の水とす。出でて夫より牧の
水入。傳ふて下きたる山國
の。東北濱より出るなり。

乙部、是日川。あり。さふ石嶺、
上の國。江良町川北南へ。
越きて。福嶋。初田川きた、
東川北東なる。第飯濟
ふる有川。東濱より鳥
嶋川。蒲郡川。野田毛川。

國内温泉多くあるなかに。
熊石近くに平田内見日岳
の麓白湯。安久流川の水上に
湧く出るなんなる湯。東
の河汲濁川其外数〻悪さ
きぞ。拵えし味はる北海道
道の内にて殊更に。シヤモ地
といひて昔より人を移住
し地を開き。早く夷類を
服せしめ。拵ぐ人口も自ら
余北十國を合せても四分一
にそなり及ぶ如程繁殖し

たる其數凡八万六千二百余。
まして人元も風俗も陸奥
にまさる所も多しまず
其第一ずゝ後志の國を南
の渡島より東北へつけ細
長く延ひたる東西石狩と

界を隣す東南ハ膽振の
國と脊合ひ界い都てこま
たる西北面ハ一体に日本
海の浪あらく荒き磯を
岸づたひ浦と岬の数多く
渡島と界の本蝦夷の略を

過てまたび回別や先づ一番の一
小灣内より流るゝ回別の川乃
水上二つ有て其の一源は勇
拉岳獵振の國より勇拉の川
と同じき水源ふく東へ
西へ流れ遠ざかり又北へ流れて

鍋岳北。この川口より西へ
次第に海ふさし出たる岬ふ
天狗太田山北へ流れ西の海上
る。三角形乃嶋あり。之を
奥尻郡と云。是より地方又
四方平原曠野引きつゞき。

中を流るゝ太櫓川。北より水
上をそ太櫓岳より流れて流る
利別川。是より頻りに大河にて
隣は猪振の鱗寒の岳より
流れ来るその川を
折過ぐ。行けば瀬棚のむ

川や三本杉の岩を越え過
ぎて岬り荊場山。樹の毛
抜けぬき仁ほふ山の樵を
白糸ゝ。滝の糸ゝ山の落の
眺望重くうつくしき所。岬
を越えて千八瀬川縄列

川や尾平川。此邊平地土こえて。田畑を開きたるなり。盧遮岳、糠森、突布岳、辨慶崎を東南へ入江むつ浦。寿都津浦漁艇高戸鯨次して。南は一の祭

業の地。盧遮岳、突布を花ゝ右歌葉と為す。船多りて紀灣ゝなるその灣中へ流れ入る。水源振の禮文木より海もて集る珠義川の西岸土地

平常。黒松四ツ谷越えて。
行通ふ生えてをてやすんべ。
膳振ヶ國の東濱人の往来
の後宮ふ。歌葉の小磯谷
浦後ろ山より前ち磯磯小
大河の「ちりべつ」ち。小海乃の

五大河の。其五目小河ちる川
遠く胆振の東より後方羊
蹄山の根を廻り。四方山ふく
百囲む。十余里程ヶ平原の
「ちうづけの地を流通し。國の
界を後ち来く。数ヶ支川

合流して磯谷孔浦の北の方。
温泉湧出る雷電の峽を越
きて岩内港。人家繁昌土地
肥沃。岩内川孔水上て岩内岳
やちせ村尻岳を硫黄の金
世るが又石炭を出るとぞ。尻

深川を越て過て。古宇郡や
積丹や。美國古平余市まて
是此五郡を西山へ延びて出
て大岬積丹岳より接内
岳。古宇、美國や古平岳是で
岬のこくまて惠直峠を余

市越高く聳ゆる金市
岳。金市岳よりわ来る水。
金市水流る金市川。川の
東を平地とし砂濱づたひ
姫ん越て。この辺まで悪路高
島や小樽郡の末なる小樽

の川北川水流る是を石狩の
國界。さて是より一里の長
さ。角そ三十里。人口一万五
百余。
扨北東に流る石狩國是を
一道の中央の内地小廣なる

大ほとして西さまの海を受ず。北は余を圍む。この所は後志搖振日高の國。此三郡さまの南ふく東より十餘里。北は別北より西さまの大海。半ば海を除ず。

圍繞して多く山ふかくして。北西東さまの一体なり。深山巡る所。其海邊より内地さまの今日前より武蔵野の原を眺る心地して。隣は搖振ふ引搖き。平原嘘嘘測知たる中

下総横一面に布蔓延し
石狩川海に注ぎ大河なり
其長きこと川口より水源
まで凡そ一百餘里東の端の
石狩の岳より流て蜿蜒
蛇の如く海に入るごとし加之

たらば之を又無數の支
川左右より加へ入て流れ
迂曲其大なるを雨竜川
天塩の両へさし出て角の
やうなる一郡の面竜の郡
なるを来る其沢あるを竜

知川宮知川より水源い東南
乃國界に降り中る十勝より
十勝岳又流れを沢を江別川を
の川とすると二河とすると右方の
方を醜津川左の方を夕
張川醜津を南乃膳振る。

醜津より大湖の水蓄る国
國蔵津の湖を出て北通る
て過き来る夕張川の水上
羅臼に丹渥の南湖水新
水源を南に出と日高膳振
の界目に高く峠夕張

岳是を北海道の第二番目に高き山又北に流れの支川を膳振と云志を経て札幌岳より東流水五番目に大なる支川也。遠内川の川口

屋敷おびゝ忘川乃川に一つ流れ入る其外支川多き中と一つあげんを煩し。この大いなる支川乃流れ入る迄山川なきゆえ北に大きく北へ向へ。石狩川の川口

を残して海岸西に向て荒き磯を成し山多く阿蘇岩岳や黄金山滝ヶ原田演益其北の方稲尾崎是も天塩と共界なり。一國内戸口は。おづのゝ九百十人余土地は前に見ふごとく平原にして水利よく地損も稀にして肥沃なり。氣候は頗る平和なり。さきに見る荒野も良田と変じて殆ど原山なし。

馬牛羊豕の牧所。人家も
多く繁昌せり。土地ゆたかなる
人も近年あり。
第四小天塩の一小島。
矢の根の大鷹股。殺生禁
石狩。兩竜の一郡。掛入。

恰も犬牙相接し。一小海
岸磯多くして。其東北を
小人地と一直線に山界。
の境へ出す。其鷹股の糸
を引る是れ矢ましき近國なり。
夕張十勝石狩やちとつん

みうしはなる山々なを一連脈なる
天塩岳。岳より落る川水。
小海乃なる五大川の第二番
目なる天塩川。北乃長さ
百五十里四太或を劔淵の。
支川あるを落ていくを東

の足を彼此と流きて末を
鷹股の根なる附之の海岸
ふ出つる所を谷地蘆原廣
漠を邊沿ほくやがて
開ん天塩浦浦のおする
猿右川川を者四の支川を。

其水源の高山より出て、北へ登
やがて西へ流れて、ゆくこと六里
ばかり、江戸の東に是を水戸
と名付國界浦より南を鷹
股の西に方なる是を下して
前に述るみなと海を山

岳多く立並ひ又川々に勝
しく、うけん屋川羽幌川
羽幌川に水上をぼろひ
つゝ、一の杉岳しるとる
岳に出る流まつく下る
さいたん屋、生田川に出る

抜ぎ苫前浦の船澗浦の沖
ふる燒尻と。天壽とは二島
對立し。各周回二里ばかり道で
をぐらし。屋つの門南高く
峙つ幌尻の岳より來る留
萌抜ぎ門口より大澤是より

海岸さし出て。石狩界ふ
るものて。美磯たのき岬
みく。其山道をふ以て
こは地名奴の險所なり。是
ふて南の湖ふして西ふる
是とは尖とし。きさて西の

人口三百數万七百
人。五地一体山多水多。天
塩乃川の川筋。平地殊
更ほくしてたの川上
のぼる事元十余里程
乃平原を見通て府寺

ふあり是迄上川中川と
二つの郡の内なり。
東五の國。北見。北海。海岸。
このき。大國。西南都。
山陰。天塩。石狩。十勝地と

界を隔てまた夫よりまた羊
腸すぐまて東南い劍路と
根元より地を搖し其の
界目を山おほく南劍里
岳を始めし胴系列岳や
温泉沸くまた石所ゑ湯

輪尾岳第〻長幔内初登
連綿はぐきて良へ伸び
たる脈を大岬竹の子や
う指出しを縋り山もて
二分して山ゑ東方を
根元物。岬の尖い知庵嶋。

是迄根室より北界にて東
千島をさし望み潮勢
劇しく山峻しく北の端
なき薩哈連海斜里の岳
より流れ出る斜里川口
斜里湊也是より西の平地

扨て遠笛蘭泊に湖を
なす流れ水の源や其水源い
釧路地の界り峠の首来
牛我にて西乃網走乃
落り出る網走湖我の水
上り程なく釧路のほり

數十の川〻集まり流れ巻き
界を越〻もて入る。綱之川
の川口より。海岸小突出
し。其さきの方野。捕峠峠
より山脈又擡て南へ引き
釧路と其界を越て西へ

折て曲〻南へ乃界を分ち
又折て十勝の國と其國界。
是より山脈〻高く石狩
國と地を隣る。南北に
益高くして千渡解牛
やほんてせう。遂に大塩と

界して。しやしこつとこ。鴨
居風尚も連る山脈の乾より
延し尾の末を天塩と界
の海岸はえまこまをいり
水の方。納紗布崎小樽港
なり。野捕の時を打絶く

西なる野捕の沼也。其西の方
常呂川常呂郡一乃大河にして。
其の川源を十勝地と界の
山脈より来る。川より西を
遠渕の沼廣く海水と通ず
るを土を隔つのみ紋別郡な

地を開き、勇別川に出でゝ、その川西に向て海岸を乃ぎ
て川口に出る。この海を入る小乃海。枝幸郡の鴨居
崎。思ふて更り過ぎ行き
て。年別湖に猿拂の湖に

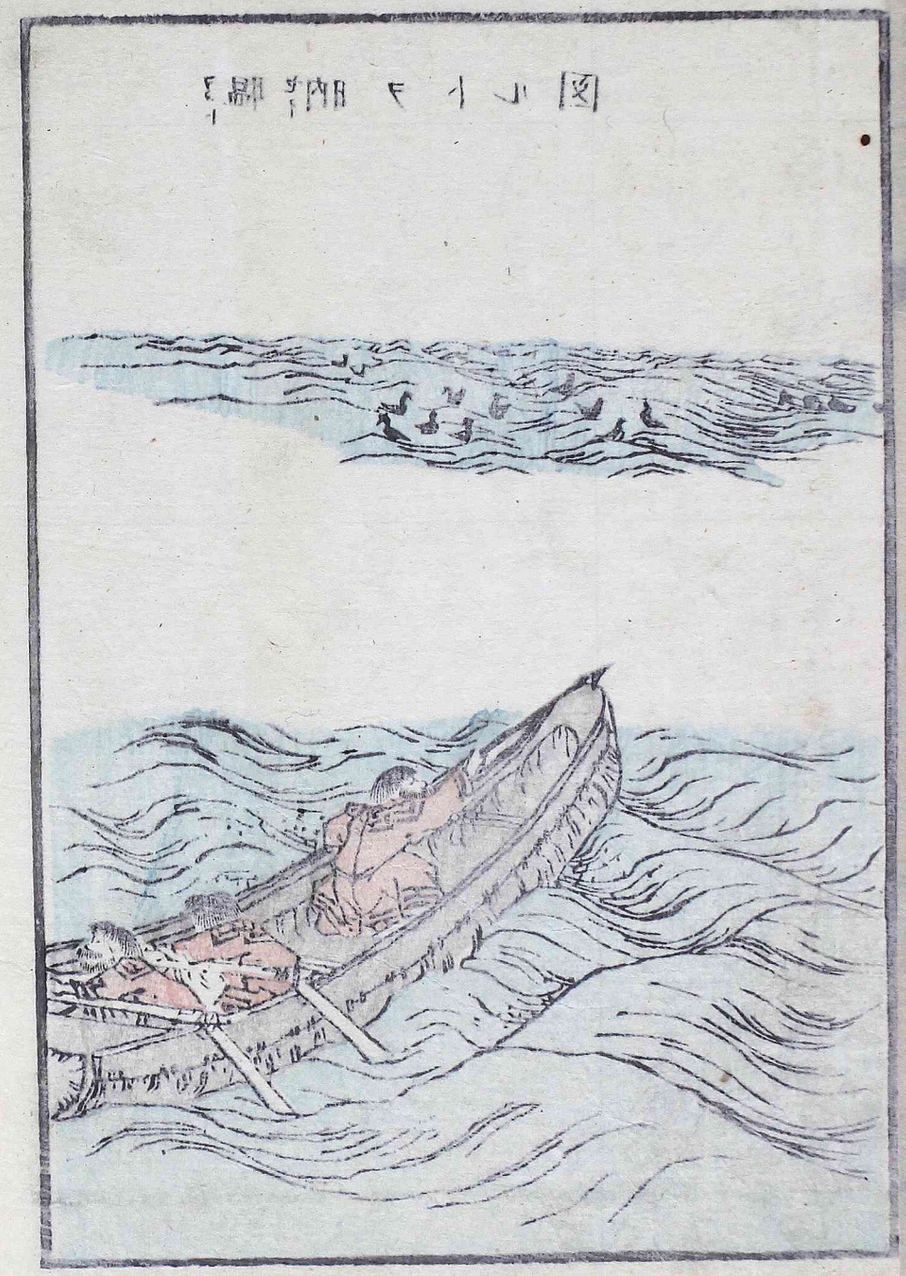
至る平地なり。乾乃端を
宗谷郡。是を極端の岬に
地北揮太と一水に海を隔
つるのみ。宗谷郡。宗谷を
廻り滿潮浦海灣ひろく
平原乃西に朱文に湖也。

細紗布崎を又こゝより西する
こゝろまゝ沖の方禮文郡
より沖の島利尾郡を高島
や海より崎つ二つ嶋圍廻者
十四五里是を日の本とて
ふしてこ一國内乃人口を二

千あまりこゝ元のりと沖く。
第六番をこゝ膳振の島後志
ゆかりおよそ南北。南を渡島ふ
地を接し細く長く折磬
の形より延し其後西より
のけて小の方取巻く國を

但志也。石狩國は二つなり。前は東南海を受け。渡島の國を右にして中に海灣をなす。廣く內地を山を川越す。灣は石狩但志の海へ注ぐ川の。其水源も大抵は志地にあるを多くは我まさしく二國は湯にて。平原湖水もまた地にし。但志渡島と蝦夷は三國界のゆゑなり。岳乃川水也らふ川四邊山城郡なり。

平原廣き海岸の。こゝ川口を小手過ぎ。ゆきて程なくをしやすん屋腥腦猩場川口なり。殊更人家繁昌なり其水源は蟹寒岳より南へ又別り。流る川に沒る。



利根川は川上にをしやまんべゝより流るゝの。壽都津へ通ふ山路にて。蟹こゑ長谷の松の方。黒松田の山越かたく。甜瓜は名物巖基。あやめ花咲く溪蓀野也。江戸

風栗の森うたさいの山峠を越るとぎく。下まで里程四の川。是まで浸志こ紀ゆきて。是より先て舟もあり。陸地をゆる路もいつて。舟を所謂しもぶき川。こゝ出れば乃

砂濱はいつ四里ゆる賤所や。慢四禮文の峠より。落て流るゝ川。ぎくゝ峠を濱乃大雜所。風景奇絶ゆ。是保後方羊蹄、ゑんぬ嵐。嶽たる山を脊ゆして

南を海灣程遠く白砂
青松濱をぐき波の打る
を渡島地は内浦岳や恵
散山後方羊蹄山の東ハ
後志國にて日高風別川の
水源なり。縱横布蔓たる所。

峠を下り或ふけし河瀬
別川の川東。有珠と山水絶
景ふて。實に港の小の方嶺
抜く黒烟を吐出て山を臼
岳や。岳北ハ小樽臼沼の北
落日窓幌に。岳に落る落

猿引川川を越まて平地
ゆて富蘭岳を左に海
岸づたひ南向行まて家
業にぎやかしく入江灣
の内をたゆたふ。えとも社
岬突出し渡嶋社の内

浦乃岳と五千お射し。膳
振の海の門を出る。家より
海を分海。風浪甚く
濱辺。中を流る幔列
川。社の源より阿蘇岩岳奴
ふる屋つ岳より社の東疏

美の温泉水噴出て岳乃末の
志きゝ川流出て都て平
地して田畑多く地力毋
年。巳年の方小海を交す。
案候温和平地味も良く。
如思ふ方ぜ志き。白

老郡より白元川。北より水上
察幌より岳の末より白老岳猿
別川より水源と五ツ向前
お接ぎ。川より末より旭の宮越
えゝ向ゝ蛇体川。美人ゝ
流るゝ垂髪の川乃水源

垂て高岳。垂て高岳。岳のふもの也。
察幌・白老の系地也。内地乃
一郡千歳とて。山の中なる
平の地。媿津・箱津の南海也。
川々あまた流流し。媿津川
ふ集まる。石狩ふ流れ入る。

この地南ふ引続き。海ふ
出て。勇拂や南ふ一の部
地牛馬澤山敷寒の里。海ふ
多鰯の漁地なり。吾妻とい
川乃二川ふて。石狩界より来
る。高岸ふてぐ山海ふ入

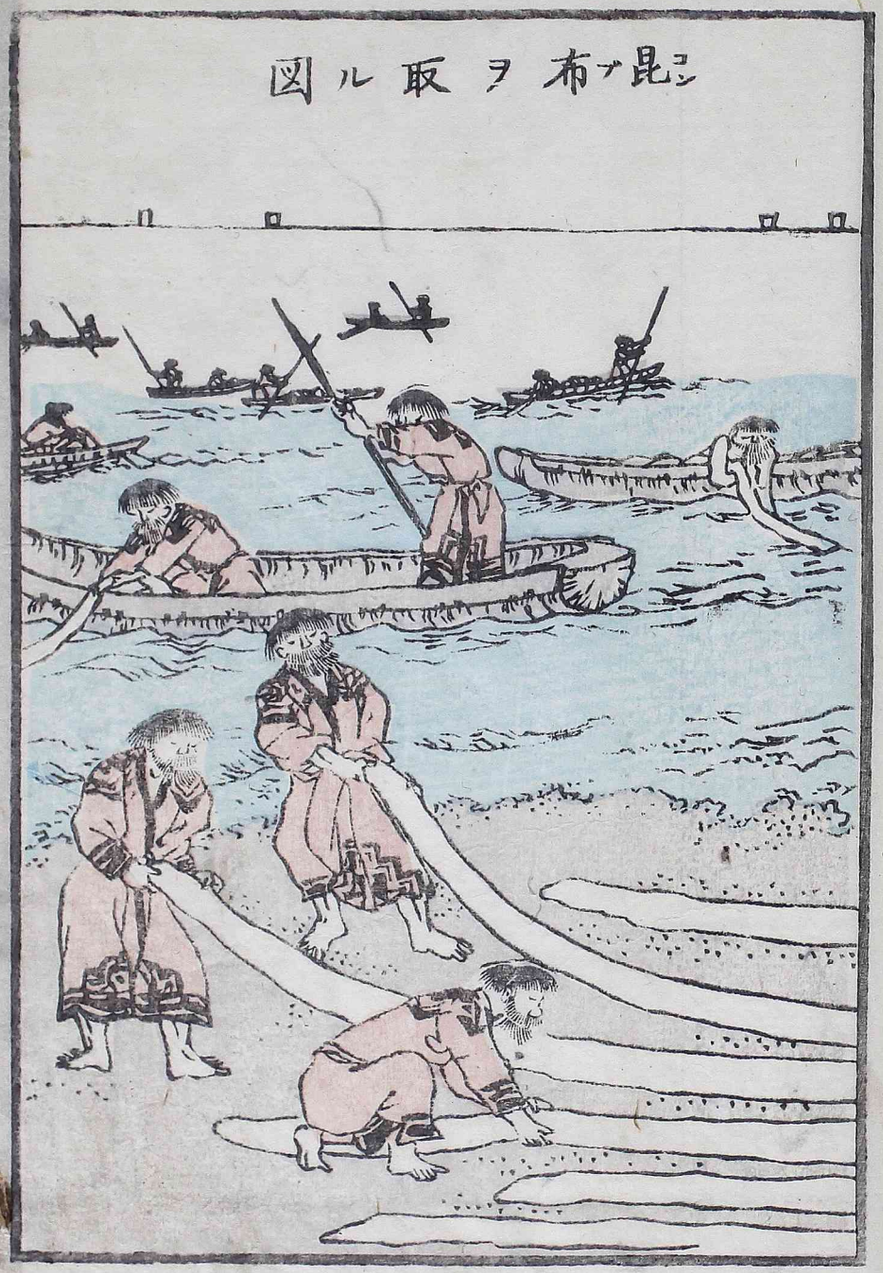
川の東より立て高ぶる山嶺日
高く其界をなる。さて國中に
人口凡そ三千五百余人にて。
土地に渡る所千隣して。
開き殊に繁なり。
背七日高き正角の三角形

乃國にして。北東西南海を更に。
海を隔て陸奥北
郡に海を隔てて対し西
北面の垂遠き膝振の國と
山界北へ向る頂を石狩
物の少張乃山より殖て東

北斜邊遠て十勝と分界し。
内地にてはそべて山川なる。其
水脈は山脈に順序
よく相並び。膳振に至る
并行し。基邊ふ為たる海
岸より。壁線となり注き入

百界を入て東一里猿古川
を石狩に夕張界より来る。
この川口のひたり志毛路
開闢最初の地沢より小川に
数志ぎく。紋別川の川口を
砂流に潜て数里沢より

大河のきそぼく川。其の源を
ゐきそびちゆり川昆布社
名所三石社。三石郡ふみを
し川。浦一の郡き浦川やこの
川ゝ社水源き十勝界社鵡
居岳ひのたさのぼりぼろ



のぼり幌別川の東なる樣似那や幌萬北面沢来り細くなり川の長も縮まりて。遂に止まる襟裳崎。三里許元海中へ突出たる。出崎なり。是を南の大岬。

廻りて東北は鑑田奴月。十湯の
國とは國界。茲より沼見乃
峠とて險隘絶壁蟻附蟹
歩。かうぶち岳のふ続き。
いのふん高き大峠。北ごの
前ほとて風俗も風土ん

遥かに変ると。我さとれ。
昔は峠より手前を白石
搬夫といひ。東を奥北搬夫
といふ。奥は眉毛も出来
なり。全身の毛さへ彼容か
里さて名ふまは禍畏乃

社判及館ハ義經社。気候
平和地味あつく。山ハ金の
坑ヲ富み。海陸とえり
産あほく。戸口人口ハ三
千余。
家八十餘ハ美形の。方面と

なり東南ハ海をへた
る國ハ。西ハ日高ハと
山界乾の方ハ石狩ハ東
ハ小人劍路ハ。西と北と
山高く。南ハ東ハ土地平ら
平原渺茫野地廣く中ハ

大川元滝より出て海に入る。山名石狩日高地と界す。札内牛呂岳。石狩小日の界なり。雲峯峰十勝岳。十勝岳より落ち来る川を小海乃中

乃五大河中の第三番目。是十勝より十勝川。水源すでに五十余里石狩川を向背し。落ち元支別の川を。千枝茂栄乃末に枝を分てるより元尚元ぎく下い

川口にて水く。乳房の乳を
出すごとし。さきだて千絲
ひろうふるく。乳汁といへる
ことふこと。於れ右ふるる
を所つたへ。花さきなる
ち本川ふる。當緑川や

千代節や。ゆう水ろう、もとう
ゆみ水一度湖と成り海
へ入る。屈るふ枝河の南北
方。唐尾ゆ南北乃一都會。
海岸野る郭ふ。於その人
口ゆ金國を。保せく千百

七十余。
東九劍路を小海の。古来
巨擘と唱へ来し。國ふり
あまたの風俗し。殊なるた
ちく土地もまく名所勝
景数しまぞ。二四を十徐ふ

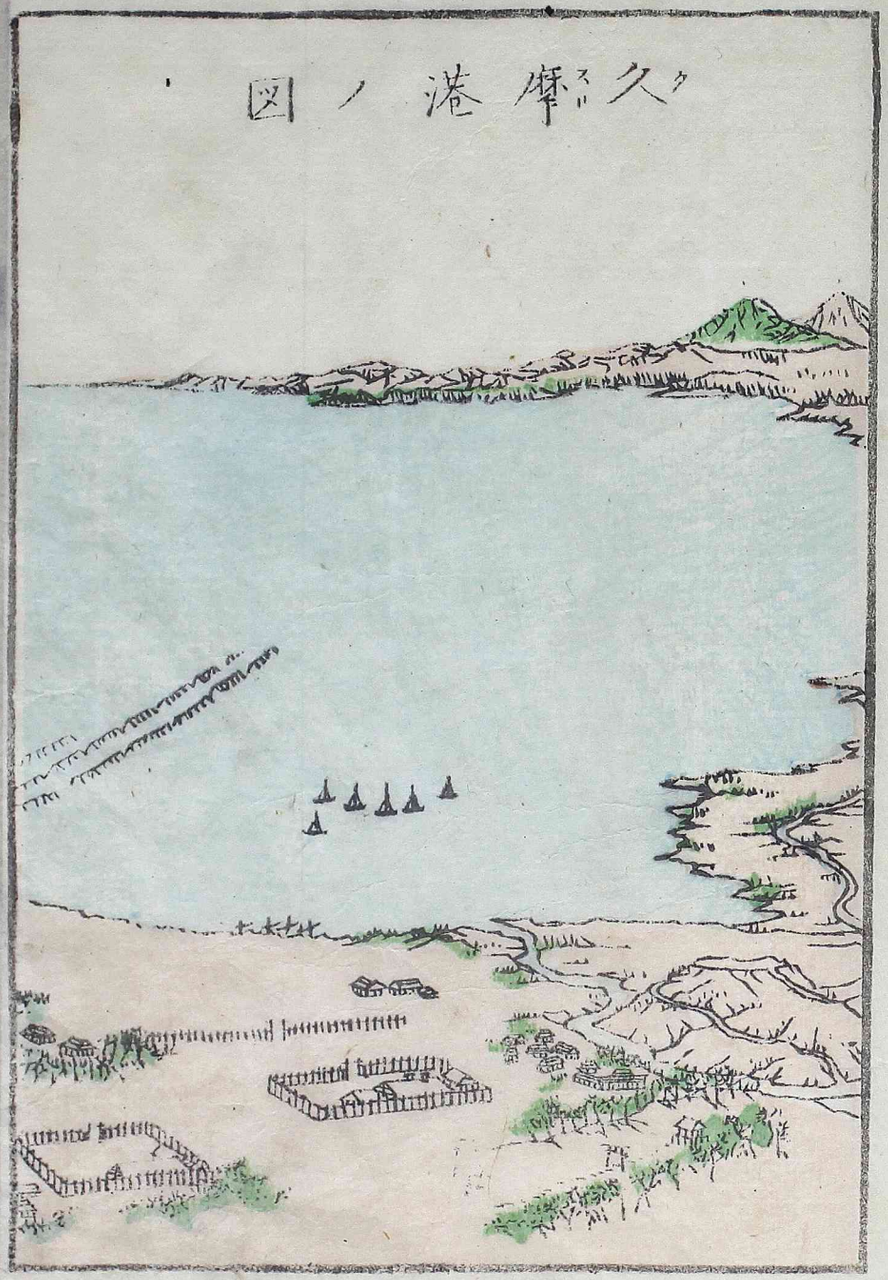
南海東を根ゝ亞と地を接
し。小を北見を山界。小見
小蔵る綱之の川北水と蔓
延し北北水源り突元と
駿別したる高山を男阿の
宮女阿寒十四寒北清

ある北より東へ屈して東
ふ播宇、西列岳女阿の寒岳
乃東ふ北より阿宇この湖水き
よく阿宇より北へ水を男
阿寒岳乃東ふ北へ久摩
の湖面も見えぬ是ぞ名ふ

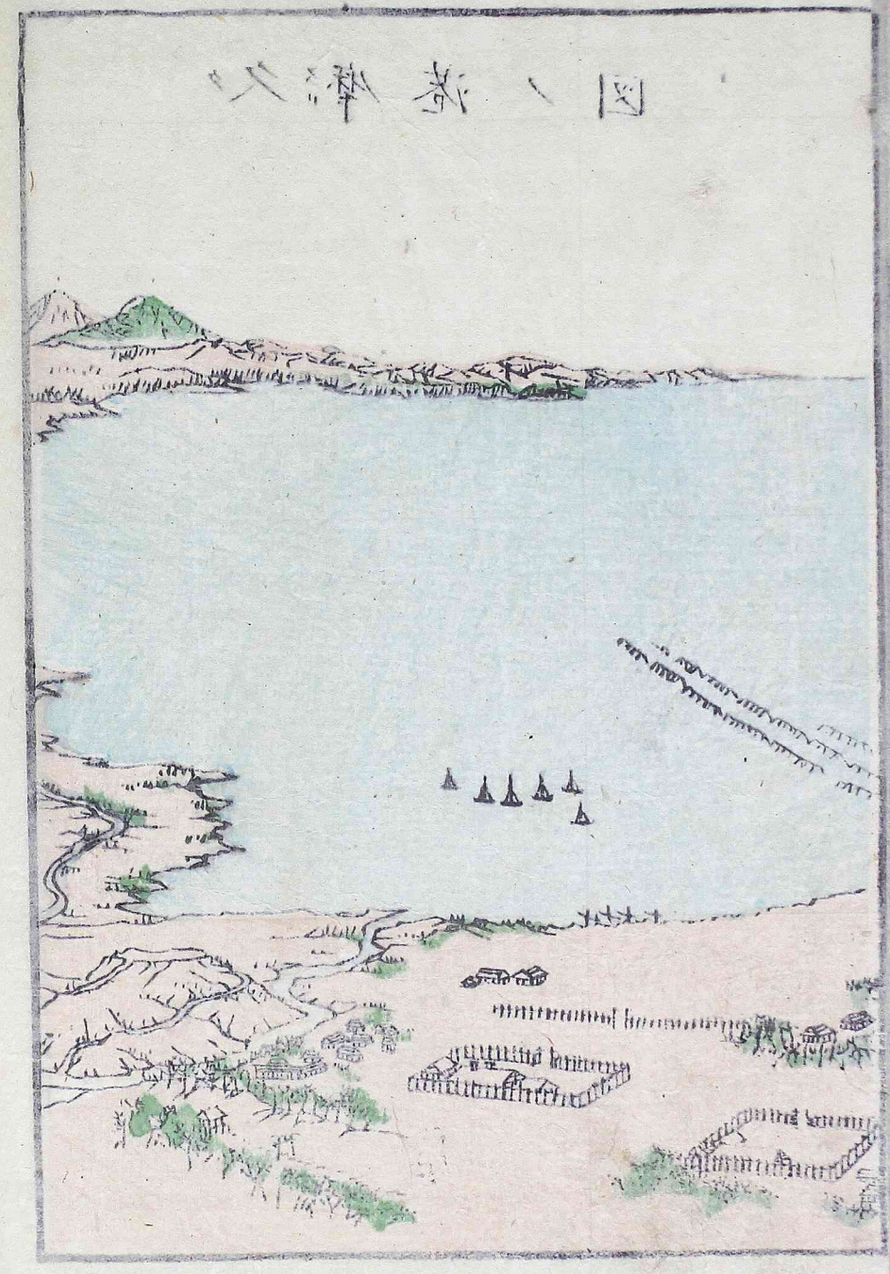
抑ふ北海の第四の川なる久摩
河なる水源より北の下へ
ゆく路の湖水を越過て
阿宇へ合て南海ふ流
辺口より劍路郡久摩の
港ふぎをゝ播宇岳乃

林藻まで。增字の池あり。口は見えぬえ不思議其周圍
所々に山あり東の方に根宮
り落る一四別に標津あり
河の水上の川にあり。また充
滿せり。さて是とこの山と。

又數ヶ所の湖の。内にあり。
あり温泉あり。洞穴あり抗
其外の風景怪奇多
しかも筆に言ふ難し
ありたる山より南に一面に
南を受て温暖のお国



きたる肥沃の地殊更久
摩球川の西平原花こと山
こと多く久摩港の眺望
男子の寒女阿蘇乃高峯
を。脊手世をおふて西南
白糠郡の岬まで。十餘の



國のうちにはなはだ幾重の峯の糢糊ゆゑにて畫なんかたきなる其尖なる日高の襟裳の岬なるまで碧なる海水深くして天を浸せる大平洋に臨みて沈るいまだ絶景なり。落の

東にそそり立て内に石巖
紛面に高く石壁巖いとなく
搖揺岩を始めとして
じすでに引続き夫より海
岸八丁海灣廣き廣
岸にいたりて絶泊

塲八江より内にそそり立て牡蠣島や
滿潮牡蠣島に成るかとも
さきずに飢饉の年なりい
餓死を免る民の食に和世
ぞとそとそとなきへ八江の沖
に大運河間廣を回り幔

戸浦是より地方細くなり。
根室の國は北は堺なく一
國都て其人口を一万五百
余人なり。
第十番は根室の国なり
へつけ細長く東を都く

海を受て千島に漸く
一水を隔て東西を望む。
西を釧路と小見て東隣
まて小見の家なる山多く
地の広き地なれ平原谷
地なして南とは乃地の端と。

正吉中の三変す。実也
たる岬と称す。南を納紗布
中たるを象の鼻ふく
似る野付郡の岬ふく。
ふく北見の西界知床崎の
崎と称す。納紗布崎の東

ふく十余の嶋列し
拔出て大なるを
即蝦丹島ふく。根室郡
の内そこの根室郡を
野付と称す間を根室乃大
海灣灣の南北を陸邊

うそ。根宮の港を過し。
北北西の方海岸ふそなん
ねふそ。きん南湖水ふそう
きん湖水の水上そを創脇の
國より迂西てそ。合地芦
原を流れ来るふそきん

屋つの河水ふそう北北ふの
方西別川こそ灣中に注ぐ
水郡村の出崎を廻過く。
海岸面平。標津川標津
のふそ茅梨郡山こ川との
数七つ之を茅梨の七ケ山

芽梨の七ケ川といふ。其ところ
より第一波より路程大
概二百余里陸路の後其
ところの國。其の人口凡百
余
万ナリ千島ところ大小

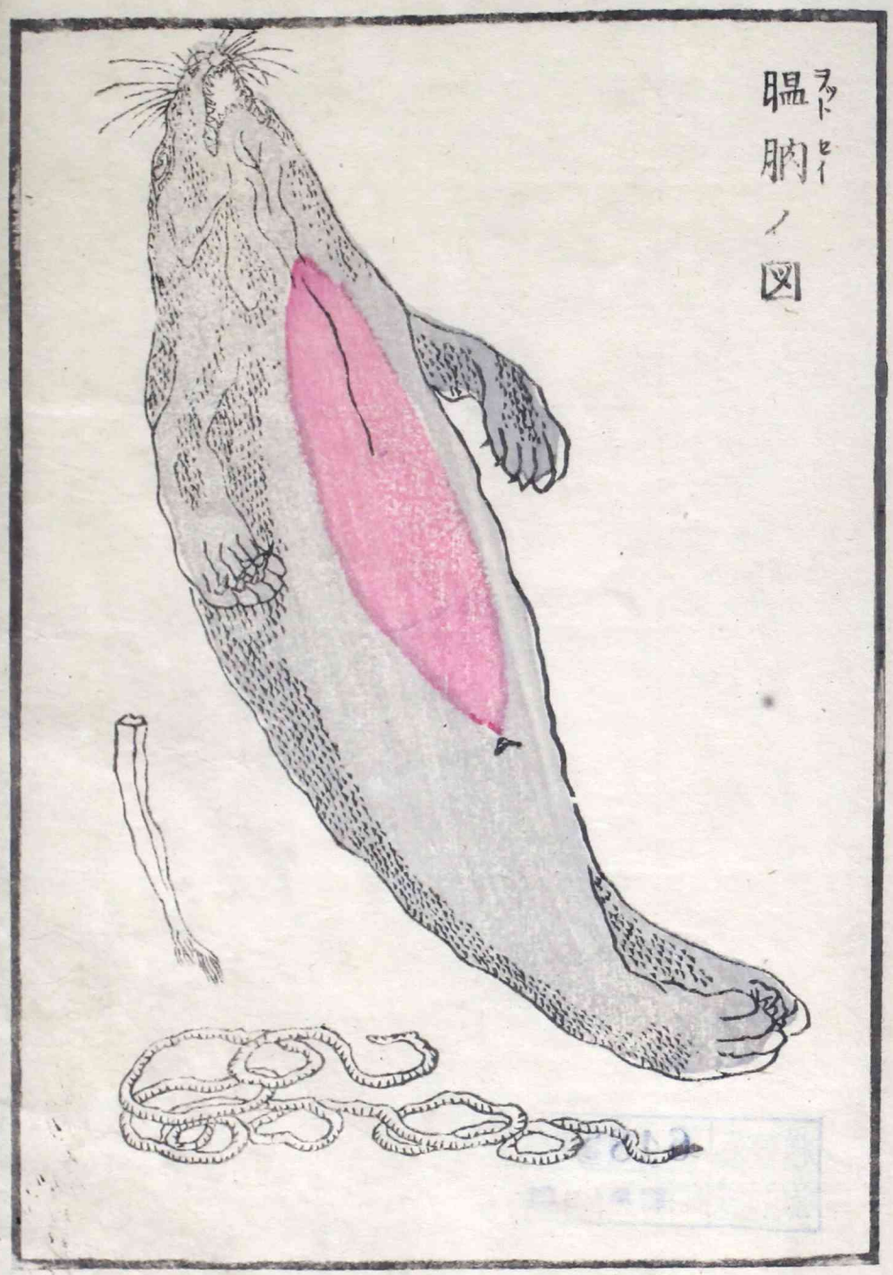
数十の島乃國根室の國其
ところ。且寅の方に当る。
順列したる其名左の如し。即ち
魯西亞エトロフ
の人ども尚クリル諸島と称ふ
るなり。我の千島のところ

ふ社。根宮ふ近き茅一社。
嶋ちふ浦後郡ふく。周回百
里ふ過ねどこれ名山ふ称地
高妙ふく。火折山ふて
茅く登ふき四里余の絶
頂ふ。湖あり。社ふ水ふ

西ふ東ふ海ふ。東ふ
大河ふ西ふ流世ふ除き
神山社。西ふ海の潜あり。東
の方ふあふ。あふ。
擇提ふ社渡口せふき山の林麓
ふ海の中ふ温泉の沸

騰たるの奇絶あり七里隔て〻擇捉を一島四郡乃長大島山をたのしいたのとき岳ちつふ岳やもまた岳さく湖をやもい湖を魚類影しく解を海面一

里余えを捕て左を居と充滿く鯨り常て游き却て生が體やあぶらを。倫を投て三鋼ふく八九尾あまを鈎て〻ま〻ま源左ふ〻そう〻ふ時捕く



腦胸ノ図

ちゝ小鳥數〻生まれ
千萬地獄内ぞ
人口を金鳴を保をとる
ほどあ我あ里夢法。

瓜生三寅著

第三大區三ノ小區
四番町壹番地

明治五年壬申十月新雕

名山閣

東京芝大神宮前

和泉屋吉兵衛

6485
昭25.4.14

横浜国立大学附属図書館
06402164